

よだかの死と修羅意識

黄, 英
中国海洋大学

<https://doi.org/10.15017/16064>

出版情報 : Comparatio. 12, pp.34-43, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

よだかの死と修羅意識

黄英

賢治の作品において、みんなが幸福になる理想世界を実現するために、自己犠牲的な行動がよく表現されている。そして、自己犠牲は（他者のため）という基本要素が含まれるため、賢治に（菩薩）というレッテルが貼られ、聖人視される傾向が出てくる^①。

また、それに反発する傾向もしばしば見られる^②。これでいいのかと疑問を感じる。本稿は賢治における自己犠牲の内実を問い直すための第一歩として、よく自己犠牲色の強い作品とされる「よだかの星」^③におけるよだかの死を再検討してみる。

自己犠牲と言う場合、必ず二つの面が備わっている。ひとつは、自己の利益を無視し、さらに自己の命までも捨てること、もうひとつは、対他関係において、その行為は他者の為になること。しかも、二つの面が同時に揃わなければならない。自己の利益を考えず、さらに自己の命を捨てる行為が、他者の為になってはじめて、自己犠牲と呼ばれるのであろう。

自分の命を捨てる行為は必ずしも常に（他者のため）を主な目的とするとは限らない。ある場合は、自分が直面する苦難からの脱出、いわゆる自己救済が主な目的ということもある。以下は「よだかの星」のよだかの死に対する位置づけを、テキスト読解並び

に修羅意識との関連を通して、試みたものである。

一 よだかの自己救済

1 二重の辛さ

大正一〇（一九二一）年ごろの執筆と推測される童話「よだかの星」^④は、次のような描写で始まる。

よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌をつけたやうにまだらで、くち

ばしは、ひらたくて、耳までさけてゐます。

足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。^⑤

こうした外形の醜いよだかは、実は「あの美しいかはせみや、鳥の中の宝石のやうな蜂すゞめの兄さん」である。外見が全く違った兄弟という設定からは、よだかの本質がわかる。すなわち、醜い外見にも関わらず、実はほかの兄弟と同じくやさしい心の持ち主だということがうかがえる。彼のやさしさは普段よく他人を助けたりすること——「赤ん坊のめじろが巣から落ちていたときは、助けて巣へ連れて行ってやった」——からもわかる。

しかし、このようなやさしいよだかは、醜い外見をもつため、よく同類の鳥たちに嫌がられる。例をあげると、自身がそれほど

美しい鳥ではないヒバリは、よだかに会うと、「目をつぶりながら、首をそつ方へ向ける」。また、もつと小さい鳥たちは、「鳥の仲間をつらよごしだよ」と、よだかのまつ向から悪口を言う。さらに、よだかを傷つけるのは助けてやった赤ん坊のめじろの母の反応である。「めじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかへすやうに」よだかから引き離して、それからひどくよだかを嘲笑する。

また、よだかの名前の中に「たか」が入っているので、真正正銘の鷹から改名を強要される。「市蔵とな。いい名だらう。そこで、名前を変へるには、改名の披露といふものをしてほしいけない。(中略)首へ市蔵と書いたふだをぶらさげて、私は以来市蔵と申しますと、口上を云って、みんなの所をおじぎしてまはるのだ」といういやがらせぶりである。さらに、鷹は改名を拒否するよだかに、「つかみ殺すぞ」と脅迫までする。

このように、醜いよだかは、彼のやさしさが同類の鳥たちから認められず、かえって疎外され、いじめられる。外見で価値判断される境遇に身を置いたよだかは、辛さを感じる。

その辛さの象徴として、その夜の自然描写に注意を払うべきである。「雲が意地悪く光って、低くたれて」、「向ふの山には山焼けの火がまつ赤」である。同類からいじめられて辛かったよだかの目には、雲も意地悪く見えてしまう。ここにおいての雲はむしろ彼を囲む険しい外部環境を象徴していると言えよう。向こうの山の真つ赤な山焼けはよだかの荒波のような辛い内面を暗示していると思われる。

右に述べた辛さは外部からの辛さだが、次にあげるのは彼自身

の内部からくる辛さだと言える。それは、よだか自身が加害者側に回ったときに生じるものである。

よだかの主食は昆虫で、普段虫を食べることについてはいささかの違和感も感じずにいたが、その夜は違う。一匹のものがいてカブトムシを飲み込むと、よだかは背中が「ぞつとした」ように思う。そして、もう一匹のバタバタしているカブトムシを無理やりに飲み込むと、よだかは急に胸が「どきつと」して、泣き出す。そして、次のような独白をする。

(あゝ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただの一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。(後略))

よだかは、今まで数えきれない虫を殺した、つまり、今度は自分が加害者であることに気づく。かつて「僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない」と、自分がやさしい性格の持ち主であることを、心の中で固く信じていたよだかだったからこそ、自分の加害行為にいつそうの辛さを覚えずにはいられない。と同時に、「僕が今度は鷹に殺される」と、生きている世界が殺しあいの世界である、という残酷な事実気づいて、絶望的な辛さを感じる。

以上述べてきたように、よだかの辛さは二重の意味を含んでいる。まずは外的要因に由来する辛さである。醜い外見のため、自分の真の姿、つまり、やさしい性格を同類の鳥たちに認められず、

さらに、疎外され、いじめられること。つまるところ、これは、よだかの真価を正確に判断し得ない価値体系に対する不満とも言えよう。もう一つは、自分の内部に由来する辛さである。鷹が自分を殺すように、自分も虫を殺す存在であり、殺し合いの世界の中で自分も殺しの側に属する一員でもあるという認識。このような二重の辛さを背負うよだかは解放の道を求める。それは、如何なる道なのか、次項で検討してみる。

2 二つの殺し、よだかの選択

自分が加害者であることを気付かせるものは、鷹などのような鳥たちから受けたいじめによる辛さそのものである、ということ。は、すでに諸家によって指摘されているとおりである^⑥。これはよだかの独白を読めば明白であろう。論述上の便宜のため、前に引用した部分も含めて独白全文を次に記しておく。

(あゝ、かぶとむしや、たくさん羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただの一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行つてしまはう。)

よだかの脳裏の論理を図式的に表すと、こうなる。虫を殺す自

分——自分を殺す鷹。この二つの殺しを線でつなげることによって、自分の殺す行為の残酷さに気付くことになる。

しかし、この二つの殺しは性質の異なるものであることに注意を払うべきだと思われる。すなわち、よだかの殺す行為は生きていくために避けられないものであるのに対して、鷹の言う殺す行為はよだかに対する理不尽の脅迫であり、これは必ずしも行われなければならないことではない。

とはいえ、よだかの中では、両者の内在的な差が無視され、その行為の結果だけが気に掛かっているようである。これは、その結果だけで、十分自分の殺す行為に気付くことができるからである。このように考えると、鷹の言う殺しの行為は、よだかのそれとは異質なものであるにもかかわらず、後者を悟らせるためには不可欠なものかもしれない。

前述のように、よだかは二重の辛さを背負い、そこから解放の道を求めるのである。前に引用した独白文中で、まず「僕はもう虫をたべないで餓えて死なう」という一つの道を思いつく。これはたしかに加害者でなくなる有効な方法だと言わざるを得ない。もちろん、生きるために避けられない殺しの行為に対して、もう一つの便宜上の措置を、よだかは知らないわけではない。これは「どうしても取らなければならないときのほかはいたづらにお魚を取ったりしないやうにして呉れ」というように、彼自らが弟のかわせみに提示した道である。つまり、生命維持のためにものをとるのを最小限にとどめることである。しかし、よだかはこの二つのいずれも選ばない。この世で餓死するという道を選んだとす

ると、これは真正正銘の自己犠牲になるのだが、よだかはこの道を選ばない。前に引用した独白文で、よだかの思いは「いやその前に（餓死する前に——筆者注）もう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行つてしまはう」というふうが続く。この文脈から見ると、よだかが餓死を選ばなかった理由は、餓死する前に、鷹に殺される可能性があるから、すなわち餓死を選ぶ機会がなくなるからだと言えよう。

では、なぜ、弟のように最小限にとどめる道を選ばないのか。これも「その前にもう鷹が僕を殺すだらう」という鷹の脅迫が原因になるだろう。こうして、この道も鷹の脅威によつて塞がれるのである。

それでは、なぜ、鷹に殺されるのを嫌がるのか。鷹に殺されるという結果——死Ⅱ加害者でなくなる——だけから見れば、これは餓死することと同じである。死という結果だけを追求するならば、鷹に殺されることを選んでもいいはずである。にもかかわらず、よだかは何もせずにこちらの結果を選ばない。これは、二つの死の内実が異なっていることを、よだかが十分に知っているからであろう。餓死というのは、他人のために犠牲になるという死の価値が認められるのに対して、鷹に殺されるというのは、鷹のいじめに屈服したという結果だけが残り、その死の価値はゼロに近いと、よだかか思っているからだろう。言い換えれば、よだかが求めるものは、加害者でなくなることと同時に、自分の価値も認められるような死であると言える。こうして餓死するチャンスから逃れる以上、自身の価値を追求するよだかに残る道は、別

の世界へ行つてしまうことしかない。この道なら、加害者の立場から逃れられれば、鷹に殺されるという無意味な死も避けられる。

無意味な死を拒否することは、よだかが自分の真の価値を固く信じていることに由来する。たとえば、自分が加害者であることに気づく前に「僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない」、むしろめじろの赤ん坊を助けたりもしたと、よだかはその善意を強調する。そして、加害者であること気づくと、すぐ「僕はもう虫をたべないで餓えて死なう」と餓死の覚悟までする。また、鷹に改名を強要されたときに、「それはあんまり無理です、私の名前は私が勝手につけたものではありません。神さまから下さつたのです」と拒み、さらに「つかみ殺すぞ」と鷹に脅迫されると、よだか「そんなことをする位なら、私はもう死んだ方がましです」と、命を捨てても名前を固持しようとする。よだかにとつて、名前は神様からもらったもので、自分の生きる価値を表すものだからである。名前を奪われることは、自分の存在価値を奪われることを意味する。したがつて改名を拒否することは自分の価値を固守する、さらに言えば、自我を強調するということになるであろう。

3 他者との関係から

こうしてみると、よだかが別の世界に脱出する理由は、殺したいという世界を離れたいからだけでなく、自分の価値を認めてもらいたいということにもあるだろう。

よだかは生物間の弱肉強食の殺し合いの現実世界に絶望し、自分の価値を認めてくれる世界を求めて、毎日泣きながら夜空を飛び回り、ついには空の遠くへ行ってしまうと決意する。よだかは空に向かって飛んで行き、太陽や星たちに連れて行ってくれるよう懇願するが、いずれからも拒否されてしまう。絶望の果てに決死の飛翔を試み、からだは燃え出して、青い美しい星に転生するのである。

よだかの結末について、多くの研究者が注目し、論じている。その中で代表的なものは、梅原猛⑥の見解である。梅原は「修羅の世界をテーマにした童話のなかでもっとも美しく、もっとも深く賢治の思想が表現されている」と指摘し、「よだかの行く道はただひとつ、殺し合いの世界を離れて理想の国へとまっしぐらに絶望的に飛翔を試みることであり」と述べている。

この梅原の見解から、以下のことが確認できる。まず、よだかが生きている世界は理想世界ではなく、むしろ苦痛に満ちた修羅の世界であるということ。次は、よだかはその苦痛の世界から脱出したいということ。また、よだかの到達した世界は理想の世界であることである。

よだかの到達した世界が理想の世界である点は、童話「双子の星」の結末における二人の星が帰還した天上世界と同じように見える。しかし、双子の星にとつては、それは元の世界への回帰であるが、よだかにとつては、それは一度死ななければ到達不可能な未知の世界である。

とはいえ、よだかの生きている世界が修羅の世界であり、そこ

から決死の脱出を試みた、ということとは否定できない。もちろん作品に出てくる修羅の世界とは、ただ殺し合いを意味するだけではなく、冒頭にあげた自分の醜い身体による他者からの疎外という意味をも含んでいると言えるだろう。このような修羅からの脱出のためのよだかの死は、はたして他者のためになるのか、という疑問点が出てくる。

そこで、次に、他者との関係からその死を考えてみよう。

よだかは現実世界を離れ、遠く向こうの空のほうへ行こうと決心し、太陽に頼んだとき、次のような台詞を残している。

「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れて行って下さい。灼けて死んでもかまいません（傍線は筆者注）。私のやうなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでせう。どうか私を連れて行って下さい。」

ここには「死んでも」かまわないという言葉が出てくるが、あくまでも自分が抱える苦悩から脱出するための発言であり、脱出の決意の強さを表明するためのたとえだと見てもかまわないだろう。しかし、続く一文「私のやうなみにくいからだでも灼けるときは小さなひかりを出すでせう」は、何かの役には立つかもしれないと自分の存在価値にも触れているが、「お日さん」に連れて行ってもらうために付け加えた自己弁護的なニュアンスも感じずにはいられない。「他人のため」に「死んでもかま」わないという強い使命感までは読み取りにくいのではなからうか。これは前項

に述べた鷹による無意味な死を拒否することと一脈通じていると言えよう。

小沢俊郎^⑧はすでにこの作品は「求道が逃避的な小乘的な弱さを伴っている」と指摘している。妥当な見解だと思う。確かに、賢治が信仰している大乘仏教が唱える他者のために身を捧げるといふ菩薩行の要素は、よだかの死にはまだ影が薄い。少なくとも、よだかの死は、他者の為なら、体はおろか、名誉までも捨てられるという完全な献身的行為とは言えないだろう。もちろんよだかの死は結果的には本人が言うように何らかでみんなの役には立つ可能性はあるが、一方それは自己の価値が認められないのはこの世が悪いからで、そんな苦悩に満ちたこの世から自分を救出したいという傾向も強いと言わざるを得ない。要するに、「よだかの星」においては、「みんなのため」というモットーはまだ自覚的にはつきりした形で出されておらず、よだかの死は他者のための自己犠牲の死とまでは言えないであろう。

二 「春と修羅」における自己否定

前述のように、よだかの死には、自己救済的な要素が強い。では、なぜ、自己救済が必要なのか。前にも触れたが、よだかの生きている現実世界は修羅の世界であるから、そこからの脱出、つまり自己救済が、必要になるのであろう。

修羅からの脱出が賢治生涯の課題であるということに関しては、諸家の意見は一致しているところである。そこで、ここで修羅とは何なのかを考察し、そして、修羅における自己否定の意味を検討してみたい。

修羅についての解釈をいくつかの参考書から抽出してみると、以下のようになる。

一 『仏教辞典』^⑨の場合

阿修羅：あしゅら サン스크リット語 *asura* の音写。略して〈修羅〉。〈阿素羅〉〈阿須倫〉なども音写し、また〈非天〉〈無酒神〉（いずれも通俗的な語源解釈に基づく）などの漢訳語もある。血気さかんで、鬪争を好む鬼神の一種。原語の *asura* は古代イラン語の *ahura* に対応し、元来は *ahura* と同じく〈善神〉を意味していた。しかしのちインドラ神（帝釈天）などの台頭とともに彼らの敵とみなされるようになり、常に彼等に戦いを挑む悪魔、鬼神の類へと追いやられた。原語を〈神（*sura*）ならざる（否定辞 *as-*）もの〉と解する通俗的な語源解釈（漢訳：非天）も、恐らくその地位の格下げと悪神のイメージの定着に一役買ったと思われる。

仏教の輪廻転生説のうち、五趣説では独立して立てられないが、六道説では阿修羅の生存状態、もしくはその住む世界が〈阿修羅道〉として、三善道の一つに加えられている。仏教ではまた、天竜八部衆にも組み入れられて、仏法の守護神の地位も与えられた。また密教の胎藏界曼荼羅（一両界曼荼羅）では、外金剛部院にそ

の姿を見ることが出来る。図像学的には三面六臂で表わされることが多く、(中略)戦闘を好む阿修羅神は古来仏教説話などを通じてわが国にも広く知られ、(中略)なお、阿修羅の好戦を象徴する阿修羅王と帝釈天の戦闘は『具舎論』や正法念処經の所説に由来するもので、そのとき帝釈天宮に攻め上がった阿修羅王が日月をつかみ、手で覆うことから日蝕、月蝕が発生するとも説かれる。

(後略)

二 島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』^⑩に付載された「法華字解」の場合

〔阿修羅〕(Asura) 略して修羅ともいふ。非天、非類、不端正と訳す。十界、六道の一。衆相山中、または大海の底に居り、鬪争を好み、常に諸天と戦ふ悪神なりといふ。

次に、賢治が用いる「修羅」という表現の意味は何なのかを見てよう。

賢治が自費出版した詩集『春と修羅』において、最も早く修羅が現われるのは同じ題名をもつ詩^⑪「春と修羅」(一九二二年四月八日作)である。関連部分を取り出してみよう。

心象のはいろいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんの詔曲模様

(中略)

いかり(傍線は筆者注、以下同)のにがさまた青さ
四月の氣層のひかりの底を
唾し はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ

(中略)

まことのことばはうしなはれ

雲はちぎれてそらをどぶ

ああかがやきの四月の底を

はぎしり燃えてゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

(中略)

まばゆい氣圈の海のそこに

かなしみはあおおおふかく

(中略)

まことのことばはここになく

修羅のなみだはつちにふる

(後略)

ここで、「おれはひとりの修羅なのだ」という自己規定が繰り返し宣言されている。修羅は「いちめんのいちめんの詔曲模様」のなかで、「いかり」の感情にとらわれ、「四月の氣層のひかりの底」や「まばゆい氣圈の海のそこ」を「唾し はぎしりゆきき」する。そして、深い悲しみに沈み涙している。「いかり」や「かなしみ」

というマイナスの心的状態を表わす言葉が、修羅の特徴を表わすキーワードとなっていると言えよう。

恩田逸夫の研究によると、賢治における「修羅」という言葉の使い方は二種類に分けることが出来るという。一つは「修羅的人間」という意味、もう一つは「修羅の状態」という意味である。上に引用した「おれはひとりの修羅なのだ」は「修羅的人間」という意味で用いられているだろう。「修羅の状態」の意味で用いられている例としては、恩田は賢治の妹トシ子への挽歌の中の「無声慟哭」(一九二二年一月七日作)の冒頭部分を挙げています。

こんなにみんなにみまもられながら

おまへはまだここでくるしまなければならぬか

ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ

また純粹やちいさな徳性のかずをうしなひ

わたくしが青ぐらい修羅をあるいている(傍線は筆者注)と
き

おまへはじぶんにさだめられたみちを

ひとりさびしく往かうとするか

上の引用文のなかで、「わたくしが青ぐらい修羅をあるいている」という表現で、最愛の妹に死別させられる「わたくし」がいる現実世界の様子が暗示されている。この「修羅」を恩田逸夫は「修羅の状態」と解釈している。「修羅の状態」とは、絶対的な真理から離れ、人間の「純粹」さや「徳性」が失われた現実世界

のことを指す、と理解してもよからう。

以上見てきたように、賢治が用いる修羅という用語には仏典などに現われる修羅の悪魔的、好戦的、煩惱に満ちた、などのマイナスのイメージが重なっていることがわかるだろう。詩「春と修羅」において、本来自分は一人の人間であるはずなのに、仏教でいう六道のなかで人間以下の存在としての修羅、しかもデモニックシューともいべき修羅なのだと言言するとき、そこには自己への否定が吐露されているとも言えよう。

こうした自己否定は何を意味するのだろうか。恩田の次のような見解は傾聴すべきであろう。

もとより賢治が「修羅」の境地を望み、これを理想としているわけではありません。(中略)彼の望んだ、より高い境地に至るための一つの段階であり、「上るために墮ちる」境地です。「修羅」という境地を憎みながら、しかしわが身にもっとも近い切実な状態として強い関心を抱いているのだ、ということが出来るでしょう。^⑩

恩田は賢治が修羅の対蹠的な状態である「まこと」(絶対的なもの、真理とも言い換えてもかまわない)を求めるからこそ、「修羅」を問題とし、それを自己の中、さらに社会の中に、見出しているのだと述べ、「まこと」に至るために「修羅」に身を投じる、とい

う点に、「修羅」意識の積極的な意味を認めている。言い換えれば、賢治の修羅意識における自己否定は、大きな理想の実現とつながっているのである。

恩田は続く文章で、「修羅」の内に決意して身を投じ、その苦悩を底の底まで体験することによってかえって苦悩から解放されることもあるだろう、と敷衍している。また、浅野晃も恩田と同じ趣旨のこと——「本当の幸福を探ねて出発することになるには、修羅体験を十分に体験しつくすことを必要とした」^③——を述べたことがある。確かに、理想の境地に達するためには意識的に「修羅」に下降すること、言い換えれば自己否定が必要である。また、こうした自己否定が理想境地に上がるための一段階であるという認識も妥当だと思われる。

再びよだかの死について考えてみよう。それは修羅からの脱出だと見ることが出来る、というのは前述のとおりであるが、よだかが意識的に「修羅」に下降する、というのはまだ見られない。むしろ、脱出を急いでばかりいるように見える。これは「よだかの星」が創作された一九二一年ごろの段階では、賢治が意識的に自己を否定するまでにはまだ至っていないことを意味するだろう。

自己否定から理想境地に至るまでの過程、言い換えれば、修羅からの脱出の過程が容易ではないことは言うまでもないだろう。「よだかの星」の中のよだかのように修羅から脱出するために、死を代価にしなければならぬこともある。しかし、よだかの

死は自己救済的な要素が強く、大乘仏教が唱える衆生救済の理想を自覚的に実践するまでにはまだ至っていない。法華経信者賢治の理想はやはり「みんな」の救済であり、また、その理想を実現する過程で、他者のために身を捨てること、いわゆる自己犠牲が大きなテーマとなっている。修羅からの脱出という視点から見れば、よだかのような自己救済は後年主張する自己犠牲の前段階に位置している、と言うことができるだろう。

注

- ① 佐藤勝治は『宮沢賢治入門——宗教詩人宮沢賢治とその批判——』（十字屋書店 一九七四年一〇月 三七頁）で「まこと宮沢賢治は、新しい時代の菩薩であり、宮沢文学は、新しい時代の大蔵経であると言えましよう」と述べている。
- ② たとえば、小野隆祥「彼はおそらく六輪廻を信じ、それ故に死の恐怖も痛切であつたにちがいません。畜生、鬼神に堕ちるよりは無方の空に微塵としてちらばる方がましです」と述べている。（『修羅感情と心象スケッチ』「みちのくサロン」第二号 一九七四年九月 三七頁）
- ③ たとえば、佐藤通雅はよだかを賢治自身の姿と重ねて見、その死を他の生命のためになされた自己犠牲であると指摘している。（『宮沢賢治の文学世界——短歌と童話——』泰流社 一九七九年一月 一六六頁）
- ④ 生前未発表。現存草稿の執筆は一九二一年前後と推測される。本論文中の原文引用はすべて『新校本宮沢賢治全集』第八卷（筑摩書房 一九九五年九月）によるものである。

- ⑥ たとえば、吳善華は論文『「よだかの星」——生と死のはざま』(『国文学 解釈と鑑賞』一九九六年一一号 五六頁)において、鷹はよだか自身の殺す行為に気付かせる役割を担っているといった趣旨のことを述べている。
- ⑦ 梅原猛『地獄の思想——日本精神の一系譜』(中央公論社 一九六七年六月)二二二頁
- ⑧ 小沢俊郎『「よだかの星」小論』「四次元」三四号(一九五二年一月)三頁
- ⑨ 中村元ら編『仏教辞典』第二版 (岩波書店 二〇〇二年一月)一〇頁
- ⑩ 賢治は島地大等の『漢和対照妙法蓮華経』(明治書院 一九一四年八月)を読んで、深い感動を受け、法華経信者になったと伝えられている。
- ⑪ 賢治は自ら詩と称せず、心象スケッチと言う。
- ⑫ 恩田逸夫『宮沢賢治論 人と芸術』(東京書籍 一九八一年一月)三〇頁
- ⑬ 浅野晃『「青森挽歌」論』「国文学解釈と鑑賞」(一九八二年二月)一六一頁